



おおぞら

第210号

2022年9月1日発行

発行責任者 荻野和功

編集者 木部哲也

<http://www.seirei.or.jp/mikatahara/oozora/>

理念の実践とビジョンの実現

ひかりの子兼通所あさひ課長 篠ヶ瀬 信行

今年はサッカーのワールドカップが11月からカタールで開催されます。日本代表はこの大会への出場を決め、強化試合を重ねて本番を迎えようとしています。日本代表が始めて出場できたのは、24年前の1998年のフランス大会です。それ以降、自国開催の2002年の日韓大会を含めて、現在まで6大会連続で出場しています。私は、このように大会出場が当たり前になったのは、国内のプロリーグであるJリーグの力がとても大きいと思っています。

Jリーグは、日本サッカー協会が1989年にプロリーグ検討委員会を立ち上げて準備が進められ、1991年に設立、1992年に初の公式戦が行われて始まりしました。私は当時学生でしたが、その設立時に「Jリーグ百年構想」というビジョンが出されたことを今でも覚えています。この先百年かけて地域に根ざした活動を続けていくという強

いメッセージを、初代チエアマンに就任された川淵三郎氏が熱く語っていました。当初10チームだったチーム数が58チームに増え、40都道府県にチームが所在しています。身近にチームがあることで、子どもたちがプロをめざしサッカーに親しむことができ競技人口が増えたことと、周りの大人、企業や店は我が町のチームを応援することができサッカーを支える風土が徐々に作られました。そのため優秀な人材も多くなりワールドカップに繰り返し出られる状況になったのだと思います。これは、理念に基づいて設立当初に打ち出されたビジョンに向けて、組織全体がまとまって粘り強く活動を続けた結果であると思います。

私たちが医療福祉の世界も、各法人がそれぞれの理念に基づいてそれぞれ守り支えるべき人たちのために活動しています。私たちの法人の理念は「キリスト教精神に基づく「隣人愛」です。創業者の温かい心が込められているこの理念を、職員全員が意識して、十分な理解の上で実践するために、毎年、法人から現在進むべき方向性が打ち出され、そこに大きなビジョンが掲げられます。各施設はそのビジョンを実現するために取り組みの目標を立てています。それが職場目標、職員の個人目標に繋がっています。おおぞらの通所部門でも、毎年職場目標を掲げて取り組むべきことを共有しています。その中で私が一番大切にしたいと思っていることは、「利用者さんやご家族から信頼され安心して利用できる事業所づくりをする」です。皆さんに信頼されるための努力を怠らざる職場のみならずともこつこつと取り組みを続けることが、法人の理念の実践とビジョンの実現に繋がっていくと信じています。

自分自身、この理念がとても大切なものでありこれからも自分が後輩に伝えていくべきことと改めて実感したきっかけが、2006年のおおぞら療育センターの法人移管でした。私は、移管と同時に当施設へ異動となり、それまで運営されていた社会福祉法人小羊学園の歴史や施設の設定からの歴史を詳しく知ることで、当法人とのつながりを知ることができました。施設の設定後、当時の施設長を中心として、入所規模や在宅事業が社会の必要に応じて拡大展開されてきた経緯がわかりました。そこで知ったその働きや取り組みは、私たちの法人理念と共通であると私は強く感じました。そのため、この時私が感じて得たものを、後輩たちに伝えていくことが、これからの私の役割であると思っています。思いは言葉にしないと伝わらないため、自分自身の言葉にして、それをこつこつと周囲に伝えていきたいと思っています。その言葉が何らかの形となってまた次に伝わっていくことが、私の理想です。



ひかりの子の 日常の様子

赤堀 成美

ひかりの子は、就学前の子ども達が在籍しています。一人一人の発達状況に合わせて、個別の活動や、それ以外にも楽しいと感じられる遊びを提供しています。

Aさんは、職員の声かけや音をよく聞いていて、笑顔になったり、動きが止まったり、目力が強くなったりします。絵本を語りかけると、擬音語や繰り返しフレーズをよく聞いています。『がたんごとんがたんごとん』の本では、『がたんごとん…』と擬音語が出てくるところで、表情が緩んだり目を左右に動かしたりして注目している様子があります。『がたんごとん…』の後に、「のせてくださーい」という言葉が出てきて、それが繰り返されます。同じフレーズが繰り返し出てくることや、擬音語のリズムの面白さを感じているようでした。『つつまのおいも』の本では、『おいっちにーせんし』や『ほくほくおいっし

…そしたらプーっあつちでプーっ」というような、伸びるような言葉やリズムのよいところで特に目の力を強くさせてよく聞いているようでした。

歌いかけの活動では、『てをたたきましよう』の歌に合わせて「タンタンタン」や「アッハッハ」などの部分で手拍子をします。声のする職員の方を向いてじっと集中して聞いています。時に顔が反対側に向くこともありますが、歌が始まるとまた顔を声のする方にグッと向けて聞き始めました。その様子から、聞きたいという気持ちが感じられました。テンポのよい歌に合わせて、リズムよく手拍



子の音が鳴る面白さも感じているようでした。

Aさんは他にも、キラキラテープやフラワー紙のよいうなガサガサした素材など、いろいろな感触を感じる活動もしています。視覚は、ハニカムボールなどの「色がゆっくり広がる、なくなる」変化も感じているようです。

Bさんは、他のお友達の遊んでいるところをよく見えています。そして、そのお友達の近くや興味のある玩具のところへ、わくわくとした表情で腹這いをして寄っていきます。ある日の一場面です。職員とお友達が一緒に、ボタンを押すとキャラクターの飛び出る玩具で遊んでいると、Bさんがその様子をじっと見つめて近寄り、玩具に触ります。Bさんとお友達は一緒に遊んでいるというわけではありませんが、同じ玩具に興味を持ち、お友達の顔をチラチラと見ながら遊んでいます。また、Bさんは絵本も好きで、職員が他のお友達に絵本を見せていると、その様子を少し離れたところからでもじっと見て、ニコニコ



と微笑んだ表情で近付いてきます。そして、絵本に触ります。他のお友達と一緒に絵本を見せると、じっとよく見ていました。他のお友達の様子に目を向け、興味のあるものへ積極的に身体を動かす姿がありました。ひかりの子では、一対一での活動も大切にしながら、お友達同士の関わりも大切にしています。お友達を近くに感じたり、遊ぶ様子を見たり、一緒に遊んだりすることで、楽しさやいろいろな気持ち芽生えるのだと思います。それが、子ども達の成長につながるのだと思います。

あすかの 日常活動

池谷 光恵

ゾーン編成により、あすかの利用者像は大きく変わりました。職員と会話のやりとりができる利用者。経口で食事を摂る利用者。訪問教育を受けている利用者。様々な年齢層、障害像の方がおり、リビングは賑やかなになりました。

そのためリビングでは、隣の利用者や職員の声、様々な音、物や人の動き等を感じる事ができるように利用者同士の距離や場所を感じる事ができるよう配慮をしています。

Aさんは編成以前からあすかで生活をしていました。職員の声かけに、ハッとしたり様子で目を大きくさせることがあります。また傍に行くと誰か来たなといった様子で瞬きをして気付く様子があります。日々の生活の中で訪問教育の音楽や近くに居る利用者の活動に注目している様子も見られます。音が苦手というわけではないですが、驚く様

子や力が入ることから突然に鳴り響くような器械音は苦手のように感じます。また、他利用者の活動に耳を傾けている様子からは、自分に向けられた活動でなくとも楽しむことができることを改めて知ることができました。視覚よりも聴覚から色々と感じ、捉えている方であると感じます。Aさんの体調や筋緊張から本人が安楽に過ごせるように環境を配慮することがあります。時には居室で静かに過ごす日もあります。リビングでの生活は、Aさんにとって刺激的な時もありますが、他利用者と共に過ごすことは良い時間となっていると感じます。



『日常活動では、『くじらぐも』の語りかけをしました。語り始めは、ぼんやりとした様子で聞いていました。なだらかな語りの中に生徒達が、くじらに向かって「おい」と呼びかけるとハッとしました。また、くじらの背中に飛び乗るところで生徒達の「天までとどけー、一、二、三」のフレーズが繰り返されると更に目を大きくさせ

リズムが交互にくることの違いを感じ、より集中して聞いていると感じました。活動を始め日々の生活の中からも色々と感じてもらえるよう生活環境の配慮をしていき今後も新たなAさんを知ることができたらと思います。

異動職員紹介

2号館 多和奈緒

F4病棟からおおぞら2号館に移動してきました多和奈緒です。療育の場での看護師の役割を考えながら日々奮闘しています。利用者一人一人との関わりを大切に、個別性をふまえた看護を提供していきたいと思えます。よろしくお願ひします。

2号館 前嶋実香

6月にF6病棟から移動してきました。前職場とは違う領域の看護であるため戸惑うことばかりで日々勉強ですが、1人1人の利用者や向き合いながらより良い生活が提供できるように看護を実践し頑張っていきたいと思えます。よろしくお願ひします。

リハビリテーション部

大曲正樹

三方原病院から異動となりました大曲正樹です。これまでおおぞらから三方原病院へ転棟した利用者と呼びました。今後は少しでも急性増悪や肺炎を予防し、

安寧に生活できるように利用者をサポートしたいと思ひますのでよろしくお願ひします。

おおぞら食事紹介

栄養課 原 梓・渡瀬 優子

6月の食育献立は、インゲンを利用した「いんげんの卵焼き」でした。



インゲンは、6～9月が旬の夏野菜、食物繊維やビタミン、ミネラルが豊富に含まれ、疲労回復に良いといわれています。インゲンの他にツナ・人参・玉ねぎとたっぷりの具を入れて卵焼きに仕上げ、食べやすいようにだし餡をかけてみました。



毎月19日は食育の日です。今後、おおぞらで提供しているメニューを紹介していきたいと思ひます。



路上演劇祭という催しの実行委員を始め、十年程経つ。実行委員長が同業の作業療法士であったこと、夫が演劇関係者というつながりで私も関わり始めた。この演劇祭は、毎年5〜6月に、浜松市中心街で行われる。路上が、劇場とは違い誰にでも開かれた場所であるということ、演劇という表現が誰にでも使え、理解されにくい立場の人達の意見の発信ができることが特徴である。舞踏、音楽、演劇、詩人、多文化、知的障害児者の親の会など様々な人が集つ。

最近では、自分好みの情報に容易にアクセスでき、共感できるものにならなくなった。しかし、路上演劇祭では、生身の人間が繰り広げ、思いもよらなかったことに遭遇できる。自分の知らない世界、考え、困惑するものに出会い、身近に多様な人が暮らしているのだということを思い知らされる。準備は大変だが貴重な経験だ。キヤッチコピーは「見慣れた街の見慣れないドキドキ」だ。

皆さんも、ぜひドキドキ体験を、観に来てくだわ。

苦情解決委員会より

(2022年4月～2022年6月)

受付日 4 / 11

苦情内容

【あさひ・ショートステイ利用者ご家族】

ショートステイの利用当日、新型コロナウイルス感染症(以下、コロナとする)の検査前にあさひを利用し、午後に検査を受けてショートステイを利用するのは問題ないと思うが断られた。あさひからの案内文(2月配布)にあさひからショートステイに行くことができるといった内容が書かれていたため、良いと思っていた。施設の決まり事だと言われれば受入れないといけませんが、納得は出来ない。また、案内文を出すときに通所の責任者が確認しているはずであるため、内容が違っていれば、配布前に訂正するべきである。

回答日 5 / 2

苦情解決の結果

施設内へのコロナ感染防止を目的として検査をしているため、本来であればショートステイ利用前2日間は自宅待機をお願いする状況ですが、利用者さんの生活への影響を考慮して、前日までの通所利用は可とし当日利用は不可としています。苦情受付担当者より、ご家族にこの旨を説明しご理解をいただきました。また、あさひからの案内文については確認不足であったことを謝罪いたしました。

受付日 6 / 3

苦情内容

【ショートステイ利用者ご家族】

ショートステイの送迎時、2号館の玄関前は狭く、他の利用者の送迎車があると方向転換が難しく困る。スペースを広げるために、玄関前に駐車している施設の車両を違う場所に移動してほしい。

回答日 6 / 13

苦情解決の結果

施設の車両は、緊急時に救急搬送するために玄関前に駐車しているため、他の場所へ移動させられません。苦情受付担当者よりご家族にこの旨を説明し、ご理解をいただきました。なお、2号館の玄関前はスペースが限られているため、荷物の載せ降ろし等の短時間のご利用のみとしていただき、利用者さんの乗降は駐車場をお願いすることになりました。

受付日 6 / 27

苦情内容

【入所者ご家族】

3号館玄関前の通路(公道から橋を渡って駐車場に向かう通路)を走行する職員の車両のスピードが速く危険。身の危険を感じるため、すぐに職員に注意を促すべき。数年前から感じていたが今まで言わなかった。事故が起こる前になんとかしてほしい。

回答日 6 / 27

苦情解決の結果

緊急で、施設内の全職員に対して、敷地内は徐行するように注意喚起を行いました。同時に、走行速度が速い職員がいた場合には、職員同士注意する、または、職場長や安全運転管理者へ報告するように周知しました。後日、苦情受付担当者より、この対応についてご家族に報告しご理解をいただきました。



	5月	6月
ショートステイ利用者数 (延べ利用日数)	39人 (203日)	34人 (177日)
放課後デイ利用者数 (延べ利用日数)	10人 (21日)	16人 (43日)
実習者数 (グループ数)	2人 (1グループ)	0人 (0グループ)